

しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会／浜風会会報 No.8

篠原地区の土地改良

平成十六年、「坪井馬郡土地改良区」が活動の全てを終え解散した。その機会に土地改良について考えてみる。

三方原用水は秋葉ダムから

浜風会ではこの程、合併して新浜松市に編入したばかりの北遠をバス旅行した（下段参照）紅葉に染まった山谷、天竜美林、中央構造線等印象深いものがあつたが、何と云つても存在感を示していたのが、満々と水を湛えて天竜川に縦に並び三つのダムである。佐久間ダム、秋葉ダム、船明ダム。これらが私達の地にも大きく恩恵をもたらしている姿に、頼もしくも有り難く感じた次第である。

「土地改良法」は農民の自主性を保証
広く土地改良は、いろいろな目的に
に応じて行なわれてきた。明治以前の食糧確保のための開墾、水利確保のための灌漑施設、検地実施、税収を増やすための新田開発等、幾多の流れがあつた。

そして戦後の土地改良制度の骨格を成してきたのが、昭和二十四年八月から施行された「土地改良法」である。農民が自主的に組織した「土地改良区」による土地改良事業があくま

で中心で、国、県、市町村はそれを支援するというものである。そこでこの篠原地区で生まれたいつの土地改良区を並べて紹介する。

いずれも篠原地区の産物である玉葱や、さつまいも等の農業生産性向上に大きく寄与したことは言うまでもないが、道路、排水、住宅にまで、現在ある篠原地区の姿に大きな役割を果たしてきた。これは先人達の大変なご苦労と関係者の協力があつたことを銘じたい。

篠原舞阪南部土地改良区「浜風と街道」より
設立 昭和三十四年五月
事業概要 区画整理事業 四十七年三月完了
畑地帯総合整備事業 五十七年完了
地域 篠原町、坪井町、馬郡町、舞阪町
総面積 二九五、二ヘクタール
組合員数 一、〇四二人
施設 排水機場／揚水機場
総事業費 十七億一千万円
記念碑 愛郷 坪井町四三三三

坪井馬郡土地改良区「土地改良の記録」より
設立 昭和四十三年五月
事業概要 区画整理事業 六十二年完了
地域 坪井町、馬郡町の旧国道以北新幹線以南
総面積 二十一、三ヘクタール
組合員数 二五四人
施設 無し
総事業費 一億四千五百万円
解散 平成十六年十二月記念碑 天の時、
地の利、人の和 如意寺前

浜風会(郷土の歴史を学ぶ会)の平成17年度活動のトピック 浜松市合併記念

1. 第5回近郷史跡巡り：“奥三河・北遠を訪ねる”バス旅行、11月13日(日)



- ① 長篠城址(愛知県鳳来町)・・・257号線
- ② 佐久間郷土遺産保存館・・・151号線
- ③ 佐久間ダム・昼食・・・473号線
- ④ 水窪町民俗資料館・・・473-152号線
- ⑤ 高根城(水窪町)・・・152号線

参加者：19名(内会員14名)

2. 山下孝先生の講座(世界遺産講座)

- ① 「那智の補陀洛山寺」 } 世界遺産になった
- ② 「巖島神社と弥山」 } 理由がわかった。

私達の住む郷土と一緒に勉強してみませんか？ 主として第1、3木曜日／公民館で

篠原地区の行政区について

其三

前号その二で、江戸時代の篠原地区の領主について述べた。篠原村は、初め浜松藩領のうち、幕府領と旗本服部領、中期には幕府領と三河吉田藩領、末期は幕府領となっている。坪井村と、馬郡村は幕府領であるが、中期に浜松藩領の時もあったようだ。いずれにしても篠原地区三村は、幕府領として中泉代官所の管轄下にあつて、やがて明治維新を迎える。

近代・現代

慶応三年十月大政奉還が行なわれ、薩摩、長州中心の新政府樹立。

慶応四年五月徳川家達駿河府中城主に任命され、駿河一円と遠江、陸奥両国の一部を下賜。

慶応四年九月年号を明治と改元。

明治二年六月版籍奉還(土地・・・版図、人民・・・戸籍を天皇に奉還)

同年同月浜松奉行所を廃し、郡政役所設置される。のち郡役所となる。

明治四年七月廃藩置県 静岡藩を廃し静岡県が、堀江藩を廃し堀江県が置かれる。

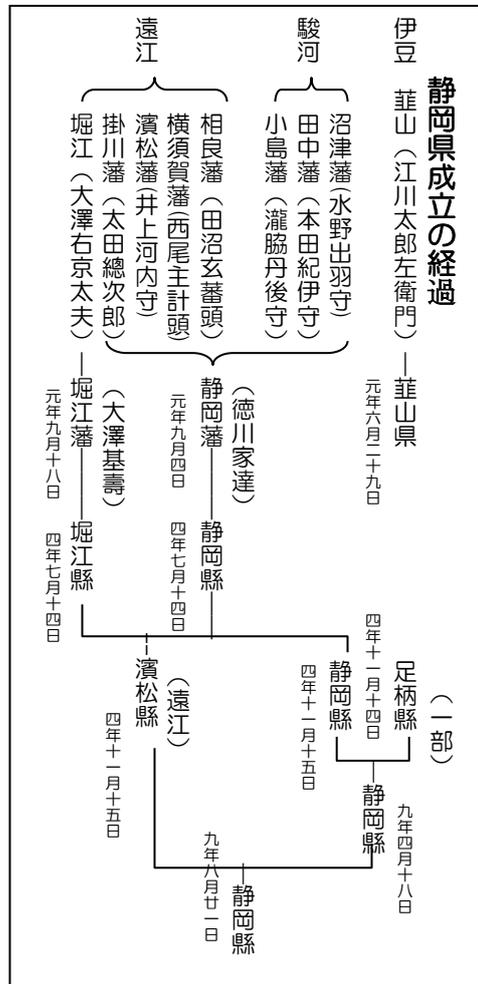
同年十一月には、静岡、堀江の二県が廃され、駿河に静岡県、遠江に浜松県が置かれる。浜松県は、高町の郡方役所を県庁に転用。第一集会所を浜松、第二集会所を見付、第三集会所を掛川に置く。

明治六年二月浜松県は集会所を廃し、大小区制に改める。浜松の第一集会所は第一大区役所となり、篠原村、坪井村、馬郡村は第一大区第八小区に属する。

明治十一年七月政府は、郡区町村編成法、府県会規則、地方税規則の三新法を公布。

明治二十二年二月市制町村制施行される。同年同月馬郡村は、篠原村に合併する。篠原、坪井、馬郡は篠原村一区となり、役場を篠原三一二番地、善養寺本堂に開設し、行政事務を行なう。

静岡県成立の経過



(一部)

足柄縣 九年四月十八日
静岡縣 四年十一月十四日
静岡縣 四年十一月十五日
静岡縣 九年八月廿一日
濱松縣 四年十一月十五日
堀江縣 四年七月十四日
堀江藩 元年九月十八日

明治十二年三月郡区町村編成法により、大小区を廃し、郡制を定める。

敷知、長上、浜名郡役所を浜松高町の旧県庁に設置。小区が廃されたので、各町村または、数町村に一人の戸長が置かれた。

明治十四年六月篠原村、坪井村は敷知郡に属し、篠原村他一か村、戸長役場に於いて、また馬郡村は、敷知郡舞坂宿他二か村、戸長役場に於いてその行政を行なう。

明治十七年坪井村は、篠原村に合併する。

郡となる。篠原村は浜名郡下となる。このときの浜名郡の町村数は四十四であった。

昭和三十六年六月、篠原村は浜松市へ合併。

遠江風土記伝の序文に「上古天皇の詔に、山河を隔て国県を分ち阡陌に随ひ以て邑を定む」とある。また敷知郡の項に「敷知郡と号する所以は淵なり、細江の水淵となる故に敷知と号す」と書かれている。この敷知の地名は奈良時代より明治中期まで続いた。

篠原村にあった 吉田領のこと

篠原村は大部分が幕府領であったが、一部に三河吉田藩領が存在していた。このことは鈴木七兵衛家及び仲右衛門家の年貢納入の文書（鈴木隆徳氏所蔵）からも分かっている。しかし、篠原村の高が約千四百石に対して僅少な高というところもあつてか、あまり話題にならなかつた。ここでは吉田領になったいきさつや規模、また年貢に関することの概略を紹介してみたい。

元禄十五年（一七〇二）、新居の関所が幕府から吉田藩の管轄に移された。それにもなつて関所周辺の幕府領九ヶ村三千六十三石余が吉田藩に編入された。このことは、豊橋市史（第六巻、元禄十五年十二月八日の記事）に見られ『篠原村』の名前もあげられている。これによりいきさつが分かつてくる。

吉田領の高は、文化九年（一八一二）及び文政四年（一八二二）の年貢可納割付之事（鈴木七兵衛家文書）より畑方で三十五石二斗四升七合となっている。この高は当初より変わっていないようである。

「畑方」で三十五石余を、対象になる畑の広さについて推察すると、当時の篠原村の畑は作物の穫れ具合から、下々中畑に位置づけされていた面積が最も多かった。この場合、石数への換算は反当たり三〜五斗代であったから、全体

申年年貢可納割付之事（文化九年） 敷知郡
一、高三拾五石二斗四升七合畑方 篠原村
四つ貳分
内五斗三升四合 定引
残三拾四石七斗七升三合
取米拾四石五斗七升九合 四つ貳分取
以下略

で十町歩内外ではなかつたかと想像できる。

◇取米の割合

高に対して取米は四つ貳分（四割二分）であった。

文政十年（一八二七）の年貢取立帳では、篠原西が十一石二斗八升五合八勺、東が二石七斗八升二合八勺になっているので、畑の分布は西の区域に多かったと思える。この取立て帳に記載されている人名は四十八名が数えられる。

◇年貢の負担の様子

吉田藩へは取高に依り金銭に換算されて納めていたようで、年により変動があつた。

取高の十四石余を四十八人で割ると単純な平均値として、一人当たり約二斗九升となる。

仲右衛門家の記録によると当家は天保十一年（一八四〇）より吉田領の分として銭で納めている。これは畑の所有者に入れ替わりがあつたものと思われる。なお、当家の年貢納入状況を見ると、幕府領として米で納める分、金銭で納める分と村入用として村へ納める金銭、そして、吉田領として金銭で納める分になっている。

篠原の村人たちも大体このような年貢納入の仕方へ負担をしていたものと思われる。幕末時に大政奉還、戊辰の役などで混乱が生じたが、当家の記録では吉田藩への納入は、明治元年まで続いている。



文政十年の年貢取立帳にある名前

- 権三郎 権右衛門 権左衛門
- 久太夫 弥平 勘兵衛 権太郎
- 長太夫 弥五兵衛 次郎兵衛
- 茂左衛門 仁右衛門 伊右衛門
- 源七 甚左衛門 市郎左衛門
- 与惣左衛門 与四郎 与左衛門
- 又十 重右衛門 又四郎
- 久次郎 (中) 惣十 (又) 久左衛門
- (又) 長兵衛 (又) 権兵衛 新三郎
- 三郎右衛門 与惣兵衛 (中) 重郎右衛門
- 三右衛門 (国方) 平五兵衛 庄蔵
- (国方) 甚右衛門 吉右衛門 茂平次
- 六右衛門 常右衛門 (国方) 三助
- 九郎兵衛 佐平 利平 又左衛門
- (中) 助右衛門 丑右衛門 銀蔵 松蔵

篠原地区の歴史について

会員 篠原町 鈴木康夫

私、生まれも育ちも篠原。先代鈴木市郎、「江戸屋」の四男坊で、現在八十余歳。地域の今日を戦前戦後を通して語ってみよう。

1. 交通の大動脈として五本の幹線

先ず試みに浜松市の地図を広げ郷土を見ると、他地区には見られない大動脈五本が、東西に走っています。江戸時代、弥次さん、喜多さんが旅した旧東海道、汽笛一声新橋をの東海道線、世界に誇る新幹線、高度成長で車の往来が激しい国道一号線、浜名バイパスです。

2. 天皇がご休憩された立場本陣

次に歴史についてみると、明治元年、明治天皇御東幸の際、御休憩なされた立場本陣鈴木喜兵衛家があり、同家にはその関係書類が一括残されています。

大正末期篠原北部耕地新川流域の間の耕地整理事業で、他町村にない立派な耕地に姿を変えました。昭和初期には、舞阪駅南からバス通りの区間宅地の区画整理がなされた結果、経済効果が上がりました。昭和三十年現天皇が皇太子時代、浜名漁協、養鰻池ご視察。老朽化した木橋の栄橋を急遽永久橋にしました。

3. 新国道開通の思い出と浜松市への合併

この頃より準備を進めた国道一号線が、昭和三十四年着工、一億四千万を費やし迂回路も三十六年三月完成。祝賀パレードには、私も村の軽トラックを運転し、先頭の県警本部長に続き八番目に参加した感激は今も忘れません。

同年五月志都呂橋が永久橋に架け替えられました。明治末期は通行札利用で大人二銭、小人一銭の銭取橋でした。この橋が、新幹線の土堰堤を構築した時に志都呂山の土砂運搬に大きな役目を果たしました。同年六月浜松市への合併は歴史に残る大きなことです。

4. 南北交通が開けいっそうの発展を期待

南部一帯の農地約三百ヘクタールの土地改良事業が国道と並行し行なわれ、四十七年三月区画整理完成。三十九年東京オリンピックの直前に新幹線開通。馬郡、坪井地区北側旧養鰻池も世相に勝てず工業団地造成で多くの企業が進出。工業発展の一翼を担っています。

舞坂宿と加宿、助郷

近世の宿駅の制度は、江戸幕府によって樹立された。宿駅の仕事は三つに大別される。一は人馬を用意し、次の宿場まで人や荷物を運ぶこと。二は旅人の休憩や宿泊に対する施設。三は飛脚を用意する通信業務である。

街道の通行量が増加する中で、宿場が疲弊し人馬を用意することが出来なくなる場合がおきてきた。その際減勤を願い出、道中奉行が許可すれば、その減じた人馬を隣接する町村に負担させることが出来た。その町村を加宿、あるいは加宿助郷といった。これは宿場機能の一端に加えられ、外面的には宿駅も加宿も全く一つの町場の様相を示していた。このような人馬の不足を補助し、人馬を出した村、またはそのため農民に果たし労役制度を助郷という。元禄七（1694）年、舞坂宿の助郷には、篠原村、高塚村、山崎村、宇布見村、志都呂村等が記録されている。

坪井村と馬郡村は1700年代には、既に加宿となっていたようである。元文四年の塩騒動の返答書に「馬郡村は舞坂宿の加宿」とある。加宿の坪井・馬郡村が合わせて舞坂宿の宿立人馬の三分の一を負担していたから、それに対する助成もその負担率で配当していたようである。しかし本宿である舞阪には、人馬継立の代償として本陣、旅籠等の休泊施設があったが、加宿の両村は人馬役を負担するだけで、宿泊施設を構えることは出来なかった。

舞坂宿から新居宿への渡海にも、大通行の際各村から漁船などを差し出している。

助郷人馬には御定め賃銭が給付されたが、小額のため各村から補助金を出さねばならなかった。また農繁期には農業生産に大きな支障をきたし、農村が疲弊していった。幾度かの改革を繰り返し、明治五（1872）年、宿駅とともに助郷制度は廃止された。

近年特筆されるのは、浜名湖花博を契機に浜松環状線が、浜名バイパス坪井インターチェンジと結ばれ、トビウオ大橋も完成。また舞阪駅も近代的設備駅舎となり、周辺も区画整理事業で、新しい町づくりが進められています。未来に向かって一層の発展を祈ると共に、この記事が皆さんの参考になればと思います。

浜風会会報第8号
浜松市篠原公民館同好会浜風会
(篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)
編集委員 鈴木清 鈴木義雄
鈴木幹久 中山清 山下勝彦
発行責任者 袴田亘一
発行平成18年1月1日
連絡先：篠原公民館気付
TEL053-448-7859